

令和7年度実践研究奨励援助事業実施校 研究主題等一覧

■グループ・個人研究

No.	園名・校名	園長・校長名	代表研究者	研究主題
1	足利くるみ幼稚園	関根 景子	園長 関根 景子	近隣3小学校との連携による架け橋期の充実
2	宇都宮大学共同教育学部 附属小学校	近藤 秀人	教諭 見目 真理	詳しく述べる力を高める国語科指導 ー小学校2年生「読むこと」の実践よりー
3	鹿沼市教育支援センター・アメリ ティホーム (鹿沼市立栗野小学校 在籍)	小野 典利	教諭 小野 典利	不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援の在り方 ～人と関わる力の育成～
4	栃木市立大宮北小学校	牧野 初美	教諭 古山 浩子	不登校児童支援における校内教育支援センターの役割と 課題 ～「チーム学校」を活かした、安心して学べる「居場 所」づくり～
5	日光市立中宮祠小中学校	川田 正己	校長 川田 正己 教頭 荏原 寛一 他 3名	チーム担任制、教科担任制の導入による学校改革の実現 をめざして
6	県立小山北桜高等学校	高橋 明	教頭 水沼 伸人	「習熟度別建築大工技能の育成と教育的効果」 ～実践的指導によるスペシャリストの育成～
7	県立のざわ特別支援学校	石井 亮	教諭 池田 愛理 教諭 鈴木 智恵	言葉を育てる生活単元学習の取組

研究主題 近隣3小学校との連携による架け橋期の充実

学校または園名 足利くるみ幼稚園

校長または園長名 関根 景子

研究者 職 氏名 園長 関根 景子

1 研究目的

卒園児から「べんきょうがづらいです。つかれていえてごろごろしています。あいたいです。」という手紙が届いた。架け橋期が少しでも充実するような取り組みを進めることで円滑な小学校への接続を図りたいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究内容

架け橋期を充実させるには、架け橋を往復する機会を増やすことがまず大切であると考え次の5つの取り組みを実施した。

① 近隣の小学校への訪問

まず、6月13日に年長クラス全員と担任、主幹とで桜小を訪問し、施設や児童の学習風景を見せていただいた。2月6日には毛野南小を訪問し、休み時間での縄跳びの練習の様子を見学するとともに、理科室や図書室等の使い方などを教頭先生から教えていただいた。校長先生からは、どの小学校でも新入生の入学を心から楽しみに待っていることを伝えていただいた。2月20日には東山小を訪問し、給食の配膳の様子を見せていただいた。

② 園の行事等への招待

7月17日に行われたくるみ祭りに小学生を招待し、お祭りを楽しんでもらった。本園の職員からも積極的に声をかけてもらい、交流を図ることができた。10月12日の運動会にも、本園の卒園生のみならずたくさんの小学生にきてもらい、玉入れ合戦などで汗を流してもらった。12月26日には卒園生の1年生の希望者を対象に、書き初め教室を行った。

③ 本園職員の小学校運動会訪問

卒園児が在籍する小学校の運動会には職員が手分けして楽しみに応援をしに行っている。卒園児の成長した姿に毎年喜びを感じているところである。

④ 年賀状による交流

卒園した現1年生全員に元担任から年賀状をだし、応援していることを伝えた。心温まるたくさんの返信が幼稚園に届いた。

⑤ 小学校の先生方との情報交換

本園は子どもたちが広い学区から登園しているため、入園予定の小学校も17校に上る。11月から年明けの3月にかけて、近隣の3小学校のみならず、全ての小学校の先生方と情報交換を行った。小学校の先生方が来てくださって細かいところまでお話しすることができた。

3 研究成果

交流を増やしたことで、卒園生の様子をより知ることができ、卒園生をただ心配していただけた本園の職員に安心感が生まれた。また、先生方とも交流を持つことで小学校さんとの信頼関係を築くことができた。

本園の園児たちも、抵抗なく小学校入学を受け入れ期待も膨らんでいるようである。

4 今後の課題

交流を増やし、少しは架け橋期を充実させた実感はあるが、成果はやや表層的である。今後は取り組みを共有するなどして、卒園生が学びを連続してとらえられるようなものがあると、より架け橋期が充実してくるのではないかと思われる。

研究主題 詳しく述べる力を高める国語科指導 ー小学校2年生「読むこと」の実践よりー
学校または園名 宇都宮大学共同教育学部附属小学校
校長または園長名 近藤 秀人
研究者 職 氏名 教諭 見目 真理

1 研究目的

低学年の子どもたちは思いを伝えたい気持ちをもちながらも、「楽しかった」など大まかな表現に留まり、語彙不足や表現の詳しさの欠如から、思いが伝わらず友達との不和を生むこともある。本研究では、子どもの「詳しく述べる力」を育てるため、国語科の「読むこと」に焦点を当てた指導を行う。筆者の表現に気付いたり語彙を増やしたりすることで、自分の思いを適切に表せるようにすることをねらいとする。小学校2年生を対象に授業内外の様子を観察し、効果的な単元構成や指導方法を明らかにし、他学年・他教科への応用も検討する。

2 研究内容

小学校2年生1クラス(35名・筆者は教科担任として実践)を対象とし、文学的文章と説明的文章を扱った単元を複数回実践した。

- ・5月 説明的文章「たんぼぼ」

【言語活動】自分が選んだ植物の一生を、図鑑の言葉を基に順序よく説明する。

- ・6月 文学的文章「名前を見てちょうだい」

【言語活動】登場人物の声や動きを想像して、子ども自身が選んだ場面でプチ演劇をする。

- ・10月 説明的文章「ビーバーの大工事」

【言語活動】図鑑などから自分が選んだ生き物について、わくわくしたところを説明する文章を書き、生き物わくわくブックを作る。

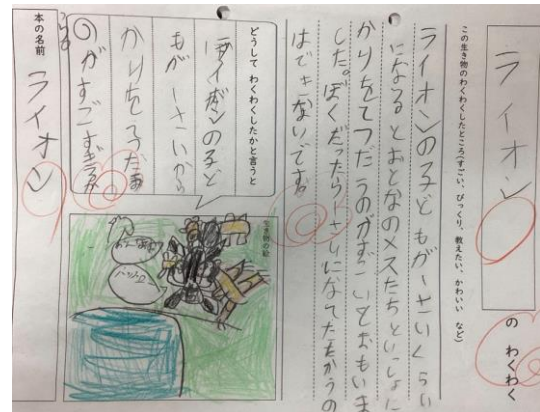
- ・2月 文学的文章「お手紙」

【言語活動】シリーズの物語を読み、心に残っ

たところを、登場人物の心情や会話を想像し吹き出しにまとめるアルバムカードを作る。

3 研究成果

本研究では、教科書に加えて多様な本の文章を扱う単元構成を行い、さらに教師が言語活動を必ず例示する指導を継続した。その結果、子どもたちは物語の心情や会話を詳しく書いたり、説明文の表現や語彙を用いて説明したりする姿が見られ、「詳しく述べる力」が向上した。



また、対象クラスのトラブルが減少し落ち着きも見られた。(なお、クラス担任の継続的な生活指導・支援も有効であったことを付記する。)

以上より、①教科書以外の文章を扱う単元構成、②教師の言語活動の例示、③それらの繰り返しが有効であることを成果として示せた。

4 今後の課題

本研究では他学年・他教科での実践ができず応用可能性の検証が課題である。今後、他学年や他クラスで同様の姿が見られた際に本研究の単元構成や指導方法を適用し、有効性をさらに確かめていく必要がある。

研究主題 不登校児童生徒の社会的自立に向けた支援の在り方～人と関わる力の育成～

学校または園名 鹿沼市教育支援センター アメニティホーム

校長または園長名 小野典利

研究者 職 氏名 教諭 小野典利

教育相談専門員 飯田拓也 福永麻里子 五十嵐彩納 柳岡光明

1 研究目的

教育支援センターの機能を生かして、不登校児童生徒の学校生活への復帰や社会的自立を促進するための適切な支援の在り方を研究する。特に通所生に共通する課題である「人との関わり」を中心に研究を進める。

2 研究内容

(1) 個別指導計画に基づいた支援

定期的な月1回の計画の見直しの他に、日々アセスメントを行って柔軟に対応した。

(2) グループワークの時間

水曜日の午後に、「関係づくり」に特化した「グループワーク」を年間を通して実施した。

(3) アメニティホーム行事の活用

各行事の事前指導で、必ず共通の目標として「コミュニケーション」に関する項目を設定した。振り返り等をポートフォリオにして、次の行事の目標設定に生かした。

(4) 活動におけるボランティアの活用

アメニティホーム専属のボランティア団体「ウィズ」との連携を深めた。活動の事前打合せで一人一人に対する支援について共通理解を図った。事後の振り返りの時間に、それぞれの関わり方と通所生の変容を共有した。

(5) 通所生の所属校との連携

月末の3日間に「チャレンジ登校」を実施した。チャレンジする「時間」「場所」「人」「活動内容」を通所生と相談して決めた。個に応じ

て月末の3日間以外でも実施した。また、チャレンジ登校の様子を職員が参観したり、学校の先生方にアメニティホームでの活動の様子を参観してもらったりする機会を設けた。

3 研究成果

- ・心理の専門家である教育相談専門員が日々通所生を観察してアセスメントを行うことにより、個に応じた支援を行うことができた。
- ・グループワークで学んだことを行事や日常生活の中で実践して振り返り、自分の成長を認識するとともに、新たな目標を設定して取り組むというサイクルを回すことができた。
- ・人との関わりに課題がある通所生同士なので、集団で活動するとき、ボランティアの方々に間に入ってもらうことは、通所生が安心して活動するために有効だった。
- ・学校と連携を密にとって、通所生が不安に思っていることや学校の対応等について事前に調整した。登校の成功体験を積み重ね、自信をもたせることができた。また、学校の先生方がアメニティホームの行事等に参加して、通所生と一緒に活動できたことは、先生との関係づくりに大変有効な場となり、登校へのハードルを下げることにつながった。

4 今後の課題

毎年通所生が変わるので、実態に応じた支援ができるように、大きな枠組みの中で、柔軟に支援体制を構築していく必要がある。

研究主題 不登校児童支援における校内教育支援センターの役割と課題

～「チーム学校」を活かした、安心して学べる「居場所」づくり～

学校名 栃木市立大宮北小学校

校長名 校長 牧野 初美

研究者 教諭 古山 浩子

1 研究目的

本研究では、心理的・情緒的な理由により登校できない（教室に入れない場合を含む）児童に対して、校内に教育支援センターを設置し、児童が安心して学べる環境を整えるとともに、全教職員で支援する体制を構築し、その有効性を検証することを目的とした。

2 研究内容

本研究では、個々の実態に応じた支援を行うため、児童が安心して学校生活に参加できるよう、環境面・心理面・学習面の側面から総合的に支援を行った。

(1) 個別アセスメントと相談・指導

面談や観察、保護者からの聞き取りを通して児童の不安や困り感を把握し、個別アセスメントを行った。その結果をもとに、安心して話せる場を設定し、気持ちの整理や自己理解を促す相談・指導を継続的に実施した。

(2) 安心して過ごせる居場所づくり

教室に入ることが難しい児童のために、校内に落ち着いて過ごせるスペースを確保した。視覚刺激を減らす、座る位置を工夫するなど環境調整を行い、児童が安心して学校生活に参加できる基盤を整えた。

(3) 柔軟な学びの場の設定

学級での学習が難しい児童に対して、個別学習や少人数学習など、状態に応じた学びの場を設定した。学習内容の量や難易度を調整し、達

成感を得やすい課題を提示することで、学習意欲の向上と成功体験の積み重ねを図った。

3 研究成果

本研究の取組により、児童が安心して学校生活に参加できる環境が整い、登校への不安が軽減された。個別アセスメントに基づく相談や、安心して過ごせる居場所の確保、柔軟な学びの場の設定を継続したことで、児童が自分のペースで学校生活に戻ることができ、登校日数の増加や学習意欲・自己肯定感の向上が見られた。また、校内教育支援会議を通して児童の状況を共有し、担任・専任教員・管理職が共通理解のもとで、支援を進められる体制が強化された。さらに、校内だけでなく関係機関との連携を密に行うことで、保護者との連携も深まり、家庭と学校が協力して児童を支える支援体制になった。

このことから、校内教育支援センターを設置し、「チーム学校」を活かした、安心して学べる「居場所」づくりを整えることで、不登校児童支援として有効であることが確認された。

4 今後の課題

本研究により一定の成果が得られた一方で、継続的な支援体制の強化や、保護者との共通理解の深化が今後の課題として挙げられる。また、不登校の要因をより専門的に見極めるアセスメントの充実や、小中連携による移行期の支援、教職員の支援スキル向上など、学校全体で支援の質を高めていく取組が求められる。

研究主題 チーム担任制、教科担任制の導入による学校改革の実現をめざして

学校または園名 日光市立中宮祠小中学校

校長または園長名 川 田 正 己

研究者 職 氏名 校長 川田 正己

中教頭 荏原 寛一 小教頭 福田 貴子

教諭 瀬尾 洋子 教諭 稲垣ゆかり

1 研究目的

本校は、全校児童生徒15名の過小規模校の小中併設校である。小学校は完全複式学級で、中学校は2学級である。児童生徒一人一人の個性に応じたオーダーメイドな教育を実現するため、教職員の豊かで多様な個性を児童生徒に出会わせ、それぞれの個性を生かし、多様な関わりを通して自立して学ぶ児童生徒を育成したいと考えた。そのため、チーム担任制、教科担任制の導入によって、新しい学校づくりに取り組んでいくこととした。この研究に取り組むことで、教員の意識改革、全校体制で取り組む組織改革を進め、教職員の資質向上と、主体的に深く学ぶ児童の育成を図り、本校の強みを生かした教育活動の実践を目指したいと考えた。

2 研究内容

①チーム担任制の導入と条件整備、環境整備(4月)

チーム担任制を導入するに当たって、本校で実施するチーム担任制の導入の目的、期待できる教育効果、システムや具体的な指導場面の例、メリットとデメリット、デメリットの解消の工夫について、研究代表者が作成した資料をもとに、全職員で共通理解を図った。

- ・小・中学校とも、各クラス2名の担任チームを配置(小学校は教務主任も担任チームに参加)
- ・原則として
チームメンバーの立場はフラットで
評価も複数で
責任も共同で
- ・教科担任制を小学1年生から実施
- ・全校体制でできるよう小中全体で時間割を作成し、学習空間の整備・調整を実施

②日常的な場面でのチームによる指導(4月～)

- ・朝の会や帰りの会を担任チームで実施
- ・各教科や領域でもチームによるTTを推進
- ・児童生徒指導もチームで協力、分担
- ・チームで情報共有の時間を設定
- ・小学校部会、中学校部会でのチーム担任制についての情報交換・工夫改善
- ・小中学校の枠を超えた情報共有

③過小規模校の強みを生かした教育課程の工夫

- ・SDGsをテーマとしたクロスカリキュラムの実践
総合的な学習の時間を核にしたクロスカリキュラムの作成・実践

各学級の探究学習の成果を発表（中間発表会・成果発表会）

- ・教師と児童との適切な関わり方を意識した授業の実践
- ・自由進度学習と授業時間の弾力的な運用の実践

④先進校の視察

- ・目黒区立東山小学校（文部科学省研究開発学校：自発的な学習能力の育成～東山小版「自己調整学習」を取り入れた新しい学習法の開発～）

柔軟な教育課程の編成→小学校40分授業午前5時間制で生み出した午後の時間の活用と実践

東山小学校版自己調整学習→1単元一人学び

- ・日光市立今市小学校（日光市チーム担任制モデル校）

チーム担任制の取り組み

⑤講師を招いての研修会の実施

- ・第1回「チーム担任制の実践と充実について」

講師：群馬県教育委員会事務局東部教育事務所
学校教育係指導主事（総括）

辻本正幸先生

群馬大学共同教育学部附属教育実践センター准教授

佐々木英男先生

- ・第2回「チームで支え合う学校づくり～チーム担任制」

講師：日光市教育委員会事務局学校教育課課長
補佐兼教育指導係長 福田恭介先生

⑥授業公開、ESDに関する講演会

講師：東京都市大学教授 杉浦正吾先生

- ・荒天のため、授業は後日、WEBで配信
中学校2年国語・小学校1・2年生活科
- ・講演は資料にて拝読 「SDGs時代の授業デザインとクロスカリキュラム」

3 研究成果と今後の課題

① チーム担任制の実践における、各指導場面での成果と課題

各指導場面でチームでの指導が可能になりより組織的な支援が可能になった。また、教員それぞれの個性や強みが発揮されたり、お互いのよさや強みを学びあったりすることができた。そして、それが児童生徒を多面的に理解したり、児童生徒へのより良い支援につながったりした。今後も情報共有を密にしながら、チームを生かした学習指導や児童生徒指導の充実を図っていきたい。

② 学校経営、教職員の資質向上という視点での成果と課題

チームによる学級経営を進める中で、互いの資質の向上につながるOJTに非常に有効であった。さらに、チーム担任制を通して、学級経営に全員が主体的に取り組むことができ、それが学校経営の活性化につながった。今後は、この成果を、校務分掌でのチーム分担制の活性化につなげていきたい。自由進度学習と授業時間の弾力的な運用の実践やSDGsをテーマとしたクロスカリキュラムの実践にも取り組んだ。今後も、本校のもつ様々な強みを生かして、チームで支え合う学校づくりを推進し、学校力とそれを支える教師力の向上に努めていきたい。

研究主題 「習熟度別建築大工技能の育成と教育的効果」

～実践的指導によるスペシャリストの育成～

学校または園名 栃木県立小山北桜高等学校

校長または園長名 校長 高橋 明

研究者 職 氏名 教頭 水沼 伸人

1 研究目的

建築大工技能の習熟度別育成を通じて、基礎技能から高度技能まで段階的に指導し、次世代を担うスペシャリストを育成することを目的とする。技能検定や技能五輪全国大会を視野に入れた実践的指導を行い、地域社会との協働活動を通して、生徒の技術的成長とキャリア意識の向上を図る。また、教育的効果を分析し、実技教育の体系化を進め、持続可能な技能者育成の在り方を明確にするものである。

2 研究内容

第一に、学年ごとに習熟度別指導を導入し、基礎加工技術、墨付け、仕口加工、規矩術の段階的習得を図った。木造実習内容を精査し、初級・中級・上級に応じた課題を設定した。(写真1, 2)

第二に、栃木県地域技能振興コーナーやものづくりマイスターの協力を得て、専門的指導を通して技能水準の向上を目指した。

第三に、技能検定やコンテスト、大会出場を目標とした訓練を位置づけ、生徒の主体性を高めた。さらに、地域協働研究として山車屋台復元活動や小砂焼陶芸家との連携(写真3, 4)により、伝統技術と現代教育を融合



写真1(左)規矩術を学ぶ今野正博さん



写真2(右)建築大工マイスター講習全体風景

させ、実践的効果を検証した。



写真3(左)鹿沼屋台彫刻研修：対馬悠太さん



写真4(右)小砂焼陶芸体験をする生徒たち

3 研究成果

習熟度別指導を導入した建築大工技能教育の実践を通して、生徒の技能面および意識面における変容を確認することができた。



写真5(左)第62回技能五輪出場の貝塚陸斗さん



写真6(右)技能五輪結団式：知事と青木遼太郎さん

第一に、技能面の成果である。習熟度別課題を設定し、基礎加工から規矩術を用いた高度な仕口加工まで段階的に指導を行った結果、建築大工技能検定3級・2級において4年連続全員合格を達成した。また、令和6年度・7年度には技能五輪全国大会栃木県代表選手を輩出(写真5, 6)するなど、全国大会レベルの技能を有する生徒の育成につながった。これにより、基礎技能から高度技能までの体系的育成が可能であることが確認された。

第二に、意識面の成果である。生徒は自ら多くの技能検定試験や大会へ挑戦し(写真7, 8)、山車屋台復元活動(写真9, 10)などの地域協働活動を通して、技能に自信を持ち、ものづくりに対する主体性や職業意識が高まった。特に、地域の伝統文化に関わる実践的活動は、生徒にとって技能の社会的意義を実感する機会となり、建築分野への進路意識の向上につながった。



写真7(左)高校生ものづくりコンテスト挑戦



写真8(右)とちぎものづくり選手権挑戦



写真9(左)桃太郎山車組立：宇都宮城址公園



写真10(右)第50回ふるさと宮まつり巡行補助

第三に、社会的評価の成果である。企業からは、技能検定合格や技能五輪出場経験が高く評価され、本校生徒の就職活動において有利に働いた事例が見られた。これは、習熟度別指導と実践的訓練が、即戦力となる技能者育成に寄与していることを示している。

以上のことから、習熟度別指導は、生徒の技能向上とキャリア意識の形成に有効であり、地域協働活動を取り入れた実践的な技能教育は、専門技能の育成と社会的評価の向上を同時に実現する教育モデルであることが明らかとなった。

本研究により、生徒は建築大工技能検定3級・2級に合格し、4年連続で技能検定試験全員合格を達成した。加えて、令和6年度・7年度には技能五輪全国大会栃木県代表選手

を輩出するなど顕著な成果を挙げた。特に習熟度別教育の導入により、基礎技能から全国大会レベルに至るまでの段階的成長が確認された。また、実習(写真11)においては規矩術の理解が深まり応用力の向上が認められた(図1)。また、山車屋台復元活動に参画できる水準に達したことは、教育的効果とスペシャリスト教育の成果を示すものである。地域協働を通じて、伝統文化継承と専門技能習得が一体的に実現し、キャリア教育としても企業から高い評価を得た。



写真11(左)3年生小屋組実習(実物大)

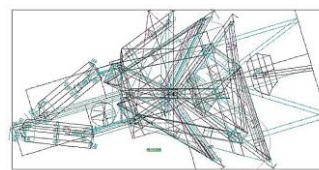


図1(右)規矩術を活用した技能五輪課題分析

4 今後の課題

本研究により、習熟度別指導の有効性と教育的効果が確認されたが、課題も明らかとなった。

第一に、技能差への対応である。習熟度別指導により上位層の技能は向上したが、すべての生徒が高度技能に挑戦できる体制の整備が必要である。基礎技能の定着と応用技能への発展を両立させる指導方法の検討が求められる。

第二に、指導環境の整備である。材料費や工具の充実、外部講師との連携強化など、継続的に訓練を行う環境整備が課題である。

第三に、教育課程全体への位置付けである。研究成果を建築実習や課題研究に体系的に位置付け、個別最適な学びと協働的な学びを実現するカリキュラムが必要となる。

今後は、地域社会との連携を深化させ、伝統文化の継承と専門技能教育を両立した教育モデルの構築を目指すとともに、指導方法や評価の改善を通して習熟度別教育の有効性を検証し、教育実践の普遍化を図っていききたい。

研究主題 言葉を育てる生活単元学習の取組
 学校名 栃木県立のぞわ特別支援学校
 校長名 石井 亮
 研究者 職 氏名 教諭 池田愛理 教諭 鈴木智恵

1 研究目的

本校は肢体不自由特別支援学校で、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に準じた教育課程の通常学級と知的障害代替えの教育課程の重複障害学級Ⅰ・Ⅱ課程がある。

小学部重複障害学級Ⅰ課程で行う各教科等の内容を併せて学習する生活単元学習において、児童が身近な人に気持ちを伝える楽しさや会話を広げる手段、他者と関わる力（コミュニケーション能力）を身に付けることに視点を置き、低学年から高学年への系統的指導の構築を検討する。

2 研究内容

日常生活全般において人とのかかわりが少なく受け身的になり、対人関係が広がりにくい児童に、自己の思いや考えを表出する場面を段階的に設定した。それぞれの場面で、児童同士のかかわりが増えたり、教師が言葉のやり取りのモデルとなったりするよう留意した指導を行った。

(1) 低学年ブロック

- ア 思いを伝える活動
- イ 順番待ちのある活動
- ウ 道具等の貸し借りのある活動

【事例1】

貸し借りの場面では「貸して」「どうぞ」「待ってね」などの言葉を示すとともに待つときは「10数えたら交代」など交代できるタイミングを確認した。使いたいおもちゃを別の友達が使っていると、教師に使いたいと伝えていたのが、直接友達と「貸して」「一緒に遊ぼう」などやり取りすることができるようになっていった。

(2) 高学年ブロック

- ア 役割分担
- イ 話し合い
- ウ 相手の思いに気付く

【事例2】

夏祭りの単元で、やりたいお店の希望が重なり主張し合っていた。教師が「どうしたらいいかな。」と投げかけ見守っていると、R児が「僕が△△にいてもいいよ。」と譲った。教師は「ありがとう、おかげで話がまとまったよ。」とR児に感謝を伝えた。次の単元の役割分担では「〇〇ちゃん、何やりたい？じゃあ、僕は△△やるよ」とスムーズに児童同士の話し合いで分担を決めた。

3 研究成果

児童が場面に適した言葉を知り、使えるようになることで、集団としての成長が見られた。

低学年ブロックでは自分の気持ちを表現することから始め、順番や貸し借り、発表等、集団の中で過ごせる自分を確立していた。高学年ブロックでは、出し物選びや役割分担などの場面に応じた話し合いを通して互いの意見を出し合い、活動の組み立てを行っていた。意見を出し合うことでよりよい生活につながる経験を重ねることができた。

4 今後の課題

低学年ブロックから高学年ブロックへの系統的指導として段階的指導の検討を行った。児童の発達が様々であることから、一人一人の児童にどの段階の指導が適しているのか見極める力が必要である。学年やブロックでくぐることなく個々の児童に寄り添った指導を目指していきたい。